

昭和文学全集

32

中短編小説集

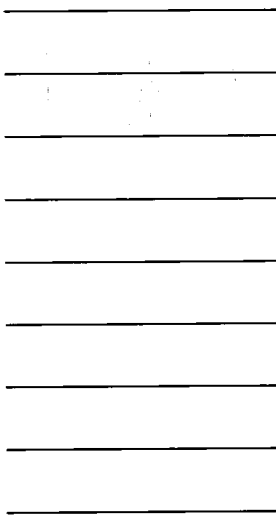
小学館

昭和文学全集



32

中短編小説集



小学館

昭和文学全集

第32巻

平成元年八月一日 初版第一刷発行

著者——葉山嘉樹・他

発行者——相賀徹夫

発行所——小学館

一〇一〇一—東京都千代田区一ツ橋二丁目三番一号

振替 東京八—二〇〇番

電話 編集・〇三—二三〇—五二三六

業務・〇三—二三〇—五三三三

販売・〇三—二三〇—五七三九

印刷——大日本印刷株式会社

製本——大日本印刷株式会社

若林製本工場

用紙——三菱製紙株式会社

著者検印は省略いたしました

Printed in Japan ISBN4-09-568032-6
©SHOGAKUKAN 1989

*造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。*本書の内容の一部または全部を、無断で複製複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

葉山嘉樹

セメント樽の中の手紙

7

黒島伝治

渦巻ける鳥の群

20

小林多喜二

一九二八年三月十五日

34

蟹工船

70

徳永直

日本人サトウ

114

稲垣足穂

天体嗜好症

132

龍膽寺雄

放浪時代 第一編

138

岸田國士

おちばにっき
落葉日記

151

山本有三

チヨコレート

170

深田久弥

オロツコの娘

180

坪田譲治

お化けの世界

186

島木健作

黒猫

199

204

赤蛙

209

原民喜

夏の花

218

田村泰次郎

肉体の門

235

田中英光

野狐

249

小山清

朴歯の下駄

256

田宮虎彦

落城

275

足摺岬

289

青山光二

刃(やいば)

302

林房雄

四つの文字

311

今日出海

天皇の帽子

321

吉屋信子

鬼火

325

五味康祐

喪神

333

柴田錬三郎

さかだち

340

久生十蘭

母子像

346

戸川幸夫

高安犬物語

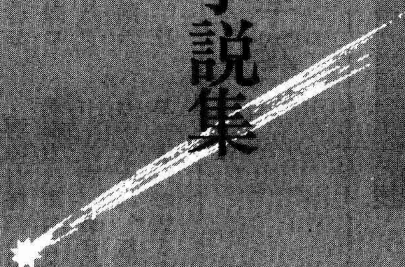
368	伊藤桂一	雲と植物の世界
392	杉森久英	猿
408	長谷川四郎	鶴
425	北原武夫	傷手
433	杉浦明平	わたしの嶺山
451	耕治人	一条の光
459	田中澄江	椿谷
488	広津桃子	石路の花
501	萩原葉子	花笑み
522	富士正晴	往生記
530	小沼丹	懷中時計
539	結城信一	空の細道
547	島村利正	青い雉
555	金達寿	対馬まで
576	大城立裕	亀甲墓

600	阪田寛夫	足踏みオルガン
617	山川方夫	愛のごとく
638	柴田翔	鳥の影
662	柏原兵三	贈り物
674	秦恒平	廬山
690	藤沢周平	時雨みち
700	高橋揆一郎	雨ごもり
710	岡松和夫	人間の火
725		楠の森
736	辻井喬	亡妻の昼前
750	津村節子	蟹の爪
757		誕生日
769	向田邦子	かわうそ
775	三枝和子	「野守」
782		桜電車

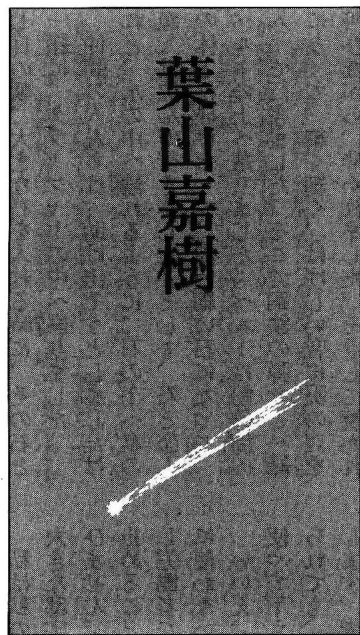
7 8 9	堂酒場
7 9 6	林京子 ギヤマンビードロ
8 0 3	野に
8 1 0	岩橋邦枝 浅い眠り
8 2 6	吉田知子 鴨
8 3 9	山本道子 風のない夜
8 5 1	魔女の樹
8 5 9	吉行理恵 井戸の星
8 6 8	森内俊雄 骨川に行く
8 8 2	李恢成 砧をうつ女
8 9 9	宮原昭夫 男の日ごよみ
9 0 8	野呂邦暢 水晶
9 2 0	長部日出雄 津軽世去れ節
9 4 0	佐木隆三 かん蹴り
9 4 8	むぎ笛

9 5 6	佐江衆一 宇宙船
9 6 6	山田智彦 マンハッタン島の女
9 7 5	幽霊屋敷
9 8 4	池田満寿夫 エーゲ海に捧ぐ
1 0 0 2	高橋三千綱 野生
1 0 1 2	尾辻克彦 肌ざわり
1 0 2 8	唐十郎 伸子の帰る家
1 0 4 1	小櫓山博 帰って行く母
1 0 5 3	作家アルバム
1 0 6 1	解説 勝又浩・曾根博義・高橋英夫・松本徹
1 0 9 0	用字用語について

中短編小説集



葉山嘉樹



はやまよしき 1894~1945、福岡県生まれ。早大文学部高等予科中退。遊蕩と流浪の生活のなかで、きびしい労働者の苦痛を体験、労働運動に奔走しつつ、「淫売婦」「セメント樽の中の手紙」を発表。プロレタリア文学に高度の芸術的完成をもたらす。代表作「海に生くる人々」

セメント樽の中の手紙

松戸与三はセメントあけをやっていた。外の部分は大きく目立たなかつたけれど、頭の毛と、鼻の下は、セメントで灰色に蔽^{おほ}われていた。彼は鼻の穴に指を突っ込んで、鉄筋コンクリートのように、鼻毛をしゃちこばらせている、コンクリートを除りたかつたのだが、一分間に十才ずつ吐き出す、コンクリートミキサーに、間に合わせるためには、とて指を鼻の穴に持つて行く間はなかつた。

彼は鼻の穴を気にしながら遂々十一時間があつたんだが、昼の時は腹の空いてる為め

に、も一つはミキサーを掃除していて暇がなかつたため、遂々鼻にまで手が届かなかつた。の間、鼻を掃除しなかつた。彼の鼻は石膏細工の鼻のように硬化しようだつた。彼が仕舞時分に、ヘトヘトになつた手で移した、セメントの樽^{もろ}から、小さな木の箱が出た。

「何だろう？」と彼はちよつと不審に思ったが、そんなものに構つては居られなかつた。

彼はシャベルで、セメント^{セメント}にセメントを量り込んだ。そして柵^{しき}から舟へセメントを空ける。と又すぐ此樽を空けにかかつた。

「だが待てよ。セメント樽から箱が出るって法はねえぞ」

彼は小箱を拾つて、腹かけの井の中へ投げ込んだ。箱は軽かつた。

「軽い処を見ると、金も入っていねえようだな」

彼は、考える間もなく次の樽を空け、次の柵を量らねばならなかつた。

ミキサーはやがて空廻りを始めた。コンクリがすんで、終業時間になつた。

彼は、ミキサーに引いてあるゴムホースの水で、一と先ず顔や手を洗つた。そして弁当箱を首に巻きつけて、一杯飲んで食うことを専門に考えながら、彼の長屋へ帰つて行つた。発電所は八分通り出来上っていた。夕暗に聳^{そび}える恵^{めぐ}那^な山^{さん}は真っ白に雪を被^{おほ}っていた。汗ばんだ体は、急に凍えるように冷たさを感じ始めた。彼の通る足下では木曾川の水が白く泡を噛^かんで、吠^わえていた。

「チエツ！ やり切れねえなあ、嬢^{お嬢}は又腹を膨^はらかしやがつたし、……」彼はウヨウヨしてる子供のこや、又此寒さを目かけて産れる子供のこや、滅茶苦茶に産む嬢^{お嬢}の事を考えると、全ががっかりしてしまつた。

「一円九十銭の日当の中から、日に、五十銭の米を二升食われて、九十銭で着たり、住んだり、箆^{へら}棒^{ぼう}奴^{やつ}！ どうして飲めるんだい！」

が、フト彼は井の中にある小箱の事を思い出した。彼は箱についてるセメントを、ズボンの尻でこすった。

箱には何にも書いてなかった。そのくせ、頭文に釘づけしてあった。

「思わせ振りのやがらあ、釘づけなんぞにしがって」

彼は石の上へ箱を打つ付けた。が、壊れなかったで、この世の中でもふみつぶす氣になつて、自棄に踏みつけた。

彼が拾つた小箱の中からは、ボロに包んだ紙切れが出た。

それにはこう書いてあった。

——私はNセメント会社の、セメント袋を縫う女工です。私の恋人は破砕器へ石を入れることを仕事にしていました。そして十月の七日の朝、大きな石を入れる時に、その石と一緒に、クラッシュヤーの中へ嵌りました。

仲間の人たちは、助け出そうとしましたけれど、水の中へ溺れるように、石の下へ私の恋人は沈んで行きました。そして、石と恋人の体とは砕け合つて、赤い細い石になつて、ベルトの上へ落ちました。ベルトは粉砕筒へ入って行きました。そこで銅鉄の弾丸と一緒になつて、細く細く、はげしい音に呪いの声を叫びながら、砕かれました。そうして焼かれ

て、立派なセメントになりました。

骨も、肉も、魂も、粉々になりました。私の恋人の一切はセメントになつてしまいました。残つたものはこの仕事着のボロ許りです。私は恋人を入れる袋を縫っています。

私の恋人はセメントになりました。私はその次の日、この手紙を書いて此樽の中へ、そうと仕舞い込みました。

あなたは労働者ですか、あなたが労働者だったら、私を可哀相だと思つて、お返事下さい。

此樽の中のセメントは何に使われましたでしょうか、私はそれが知りとう御座います。

私の恋人は幾樽のセメントになつたでしょう、そしてどんなに方々へ使われるのでしょうか。あなたは佐官屋さんですか、それとも建築屋さんですか。

私は私の恋人が、劇場の廊下になつたり、大きな邸宅の塀になつたりするのを見るに忍びません。ですけれど、それをどうして私に止めることができません！ あなたが、若し労働者だったら、此セメントを、そんな処に使わないで下さい。

いいえ、ようございます、どんな処にでも使つて下さい。私の恋人は、どんな処に埋められても、その処々によつてきつといひ事をします。構いませんわ、あの人は氣象の確り

した人でしたから、きつとそれ相応な働きをしますわ。

あの人は優しい、いい人でしたわ。そして確りした男らしい人でしたわ。未だ若うございました。二十六になつた許りでした。あの人はどんなに私を可愛がつて呉れたか知れませんでした。それなのに、私はあの人に経帷子を着せる代りに、セメント袋を着せているのですわ！ あの人は棺に入らないで回転窯の中へ入つてしまいましたわ。

私はどうして、あの人を送つて行きました。あの人は西へも東へも、遠くにも近くにも葬られているのですもの。

あなたが、若し労働者だったら、私にお返事を下さいね。その代り、私の恋人の着ていた仕事着の裂を、あなたに上げます。この手紙を包んであるのがそうなのです。この裂には石の粉と、あの人汗とが浸み込んでいます。あの人、この裂の仕事着で、どんなに固く私を抱いて呉れたことでしょう。

お願いですからね、此セメントを使つた月日と、それから委しい所書と、どんな場所へ使つたかと、それにあなたのお名前も、御迷惑でなかつたら、是非是非お知らせ下さいね。あなたも御用心なさいませ。さようなら。

松戸与三は、湧きかえるような、子供たちの騒ぎを身の廻りに覚えた。

彼は手紙の終りにある住所と名前とを見ながら、茶碗に注いであつた酒をぐつと一息に呷った。

「へべれけに酔つ払いてえなあ。そうして何もかも打ち壊して見てえなあ」と嘔鳴った。

「へべれけになつて暴れられて堪るもんですか、子供たちをどうします」

細君がそう云った。

彼は、細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。

（「葉山嘉樹全集」第1巻、昭和50年、筑摩書房刊。歴史的仮名遣い。）

淫売婦

此作は、名古屋刑務所長、佐藤乙二氏の、好意によって産れ得たことを附記す。
——一九三三、七、六——

一

若し私が、次に書きつけて行くようなことを、誰かから、「それは事実かい、それとも幻想かい、一体どっちなんだい？」と訊ねられるとしても、私はその中のどちらだとも云い切る訳に行かない。私は自分でも此問題、此事件を、十年の間と云うもの、或時はフト

「俺も怖しいことの体験者だなあ」と思ったり、又或時は「だが、此事はほんの俺の幻想に過ぎないんじゃないか、ただそんな風な気がすると云う丈けのことじゃないか、でなければ……」とこんな風に、私にもそれがどっ

ちだか分らずに、この妙な思い出は益々濃厚に精細に、私の一部に彫りつけられる。然しだ、私は言い訳をするんじゃないが、世の中には逆も筆では書けないような不思議なことが、筆で書けることよりも、余つ程多いものだ。たとえば、人間の一人一人が、誰にも言わず、書かずに、どの位多くの秘密な奇怪な出来事を、胸に抱いたまま、或は忘れたまま、今までにどの位死んだことだろう。現に私だ

って今ここに書こうとすることよりも百倍も不思議な、あり得べからざる「事」に数多く出会っている。そしてその事等の方が遙に面白くもあるし、又「何か」を含んでいるんだが、どうも、いくら踏ん張ってもそれが書けないんだ。検閲が通らないだろうなどと云うことは、てんで問題にしないでいても自分で秘密にさえ書けないんだから仕方がない。

だが下らない前置を長つたらしくやつたものだ。

私は未だ極道な青年だった。船員が極り切つて着ている、続きの葉つ葉服が、矢つ張り私の唯一の衣類であつた。

私は半月余り前、フランテンの歐洲航路を終えて帰つた許りの所だった。船は、ドックに入っていた。

私は大分飲んでゐた。時は蒸し暑くて、埃っぽい七月下旬の夕方、そうだ一九一二年頃だったと覚えてゐる。読者よ！ 予審調書じゃないんだから、余り突つ込まないで下さい。そのムンムンする蒸し暑い、プラタナスの

散歩道を、私は歩いてゐた。何しろ横浜のメリケン波戸場の事だから、些が恰好の異つた人間たちが、沢山、氣取つてブラついてゐた。私はその時、私がどんな階級に属してゐるか、民平——これは私の仇名なんだが——それは失礼じゃないか、などと云うことはすっかり忘れて歩いてゐた。

流石は外国人だ、見るのも氣持のいいようなスッキリした服を着て、沢山歩いたり、どうしても、どんなに私が自惚れて見ても、勇氣を振り起して見ても、寄りつける訳のものじゃない処の日本の娘さんたちの、見事な——一口に云えば、ショウウインドウの内部のような散歩道を、私は一緒になつて、悠然と、続きの葉つ葉服を見て貰いたいためででもあるように、頭を上げて、手をポケットで、いや、お恥しい話だ、私はブラブラ歩いて行つた。

ところで、此時私が、自分と云うものをハッキリ意識していたらば、ワザワザ私は道化役者になりやしない。私は確に「何か」考えてはいたらしいが、その考えの題目となつてゐたものは、よし、その時私がハツと氣がついて「俺はたつた今まで、一体何を考へてゐたんだ」と考へて見ても、もう思い出せなかつた程の、つまりは飛行中のプロペラのような「速い思い」だったのだろう。だが、私は

その時「ハッ」とも思わなかったらしい。

客観的には憎ったらしい程凶々しく、しっかりと足どりで、歩いたらしい。しかも一つ処を幾度も幾度もサロンドッキを逍遙する一等船客のように往復したらしい。

電灯がついた。そして少々暗くなった。

一方が公園で、一方が南京町になっている単線電車通りの丁字路の処まで私は来た。若し、ここで私をひどく驚かした者が無かったなら、私はそこが丁字路の角だったことなどには、勿論気がつかなかっただろう。処が、私の、今の今まで「此世の中で俺の相手になんぞなりそうな奴は、一人だつていやしないや」と云う私の観念を打ち破つて、私を出し抜けに相手にする奴があった。「オイ、若けえの」と、一人の男が一体どこから飛び出したのか、危く打つかりそうになるほどの近くに突つ立って、押し殺すような小さな声で呻くように云った。

「ビー、カンカンか」

私はボカンとそこへつ立つていた。私は余り出し抜けなので、その男の顔を穴のあく程見つめていた。その男は小さな、蛭蟻のような顔をしていた。私はその男が何を私にしようとしているのか分らなかつた。どう見たってそれは女じゃないんだから。

「何だい」と私は急に怒鳴った。すると、私

の声と同時に、給仕でも飛んで出て来るように、二人の男が飛んで出て来て私の両手を確りと攔んだ。「相手は三人だな」と、何と云うことなしに私は考えた。——こいつあ少々面倒だわい。どいつから先に蹴つ飛ばすか、うまく立ち廻らんと、この勝負は俺の負けになるぞ、作戦計画を立ててからやれ、いいか民平！——私は据えられたように立つて考えていた。

「オイ、若えの、お前は若え者がするだけの楽しみを、二分で買う気はねえかい」

蛭蟻は一足下りながら、そう云った。

「一体何だつてんだ、お前たちは。第一何が何だかさつぱり話が分らねえじゃねえか、人に話をもちかける時にや、相手が返事の出来るような物の言い方をするもんだ。喧嘩なら喧嘩、泥棒なら泥棒とな」

「それや分らねえ、分らねえ筈だ、未だ事が持ち上らねえからな、だが二分は持つてるだろうな」

私はポケットからありつた金の金攫み出して見せた。

もうこれ以上飲めないと思って、バーを切り上げて来たんだから、銀銅貨取り混ぜて七八十銭もあつただろう。

「うん、余る位だ。ホラ電車賃だ」

そこで私は、十銭銀貨一つだけ残して、す

っかり捲き上げられた。

「どうだい、行くかい」蛭蟻は訊いた。

「見料を払ったじゃねえか」と私は答えた。私の右腕を攔んでた男が「こつちだ」と云いながら先へ立った。

私は十分警戒した。こいつ等三人で、五十銭やそこらの見料で一体何を私に見せようとするんだらう。然も奴等は前払で取っているんだ。若し私がお芽出度く、ほんとに何かが見られるなどと思うんなら、目と目とから火花を見るかも知れない。私は蛭蟻に会う前から、私の知らない間から、——こいつ等は俺を附けて来たんじゃないかな——

だが、私は、用心するしないに拘らず、当然、支払っただけの金額に値するだけのものは見得ることになった。私の目から火も出なかつた。二人は南京街の方へと入つて行つた。日本が外国と貿易を始めると直ぐ建てられたらしい、古い煉瓦建の家が並んでいた。ホンコンやカルカタ辺の支那人街と同じ空気が此処にも溢れていた。一体に、それは住居だか倉庫だか分らないような建て方であつた。二人は幾つかの角を曲つた挙句、十字路から一軒置いて——この一軒も人が住んでるんだか住んでないんだか分らない家——の隣へ入つた。方角や歩数等から考えると、私が、汚れた孔雀のような恰好で散歩してい

た、先刻の海岸通りの裏通りに当るように思えた。

私たちの入った門は半分丈けは錆びついてしまつて、半分だけが、丁度一人だけ通れるように開いていた。門を入るとすぐそこには塵埃が山のように積んであった。門の外から持ち込んだものだから、門内のどこからか持つて来たものだからならなかった。塵の下には、塵箱が壊れたまま、へしゃげて置かれてあった。が上の方は裸の埃であつた。それに私は門を入る途端にフト感じたんだが、この門には、この門がその家の門であると言ふ、大切な相手の家がなかった。塵の積んである二坪ばかりの空地から、三本の坑道のような路地が走っていた。

一本は真正面に、今一本は真左へ、どちらも表通りと裏通りとの関係の、裏路の役目を勤めているのであつたが、今一つの道は、真右へ五間ばかり走つて、それから四十五度の角度で、どこかの表通りに合流しない、金庫のような感じのする建物へ、こっそりと壁にくっついた蝙蝠のように、斜に密着していった。これが昼間見たのだつたら何の不思議もなく倉庫につけられた非常階段だと思えるだろうし、又それほどにまで気を留めないんだらうが、何しろ、私は胸へビツタリ、メスの腹でも当てられたような戦慄を感じた。

私は予感があつた。この歪んだ階段を昇ると、倉庫の中へ入る。入ったが最後どうしても出られないような装置になつていて、そして、そこは、支那を本場とする六神丸の製造工場になつてゐる。てっきり私は六神丸の原料としてそこで生き胆を取られるんだ。

私はどこからか、その建物へ動力線が引き込まれてはいないかと、上を眺めた。多分死なない程度の電流をかけて置いて、ビクビクしてる生き胆を取るんだらう。でないと出来上つた六神丸の効き目が勘いだろうから、だが、——私はその階段を昇りながら考えつづけた——起死回生の霊薬なる六神丸が、その製造の当初に於て、その存在の最大にして且つ、唯一の理由なる生命の回復、或は持続を、平然と裏切つて、却つて之を殺戮することによつてのみ成り立ち得る。とするならば、「六神丸それ自体は一体何に似てるんだ」そして「何のためにそれが必要なんだ」それは恰も今の社会組織をつくりじゃないか。ブルジョアの生きるために、プロレタリアの生命の奪われることが必要なのとすっかり同じじゃないか。

だが、私たちは舞台へ登場した。

二

そこは妙な部屋であつた。鯉の缶詰の内部

のような感じのする部屋であつた。低い天井と床板と、四方の壁とより外には何にも無いようなガランとした、湿つぽくて、黴臭い部屋であつた。室の真中からたつた一つの電灯が、落葉が蜘蛛の網にでもひっかかったようにボンヤリ下つて、灯っていた。リノリウムが膏薬のように床板の上へ所々へ貼りついてた。テーブルも椅子もなかった。恐しく蒸し暑くて体中が悪い腫物でもあるかのよう、ジクジクと汗が滲み出したが、何となくどこか寒いような氣持があつた。それに黴の臭いの外に、胸の悪くなる特殊の臭氣が、間歇的に鼻を衝いた。その臭氣には霧のように影があるように思われた。

畳にしたら百枚も敷けるだろう室は、五燭らしいランプの光では、監房の中よりも暗かつた。私は入口に佇んでいたが、やがて眼が闇に馴れて来た。何にもないようにおもつていた室の一隅に、何かの一固りがあつた。それが、ビール箱の蓋が何かに支えられて、立っているように見えた。その蓋から一方へ向けてそれで蔽い切れない部分が二三尺はみ出しているようであつた。だが、どうもハッキリ分らなかった。何しろ可成り距離はあるんだし、暗くはあるし、けれども私は体中の神経を目に集めて、その一固りを見詰めた。私は、ブルブル震い始めた、逆も立って

のだ。何と云つても未だ体温を保っているんだからな。それに一番困ったことには、私が船員で、若いと来てるもんだから、いつでもグーグー喉を鳴らしてゐるってことだ。だから私は「好きなように」することが出来るんだ。それに又、今まで私と同じようにここに連れて来られた（若い男）は、一人や二人じゃなかっただろう。それが一々×××××どうかは分らないが、皆が皆辟易したとも云い切れまい。いや兎角く此道ではブレイキが利きにくいものだ。

だが、私は同時に、これと併行した外の考え方もしていた。

彼女は熱い鉄板の上に転がった蠟燭のように瘡^やせていた。未だ年にすれば沢山ある筈の黒髪は汚物や血で固められて、捨てられた棕櫚^{棕櫚}のようだった。字義通りに彼女は瘡^やせ衰えて、棒のように見えた。

幼い時から、あらゆる人生の惨苦と戦つて来た一人の女性が、労働力の最後の残渣まで売り尽して、愈々最後に売るべからざる貞操まで売って食いつないで来たのだろう。

彼女は、人を生かすために、人を殺さねば出来ない六神丸のように、又一人も残らずのプロレタリアがそうであるように、自分の胃の腑を膨らすために、腕や生殖器や神経までも噛み取つたのだ。生きるために自滅してし

まつたんだ。外に方法がないんだ。

彼女もきつとこんなことを考えたことがあるだろう。

「アア私は働きたい。けれども私を使って呉れる人はない。私は工場で余り乾いた空気と、高い温度と綿屑^{綿屑}とを吸い込んだから肺病になつたんだ。肺病になつて働けなくなつたから追い出されたんだ。だけど使つて呉れる所はない。私が働かなけりゃ年とつたお母さんも私と一緒に生きては行けないんだのに」そこで彼女は数日間仕事を求めて、街を、工場から工場へと彷徨^{さまよ}うたのだろう。それでも彼女は仕事になかつたんだらう。「私は操を売ろう」そこで彼女は、生命力の最後の一滴を涸らしてしまつたんだはあるまいか。そしてそこでも愈々働けなくなつたんだ。で、遂々ここへこんな風にしてもう生きる希望さえも捨てて、死を待つてるんだらう。

三

私は彼女が未だ口が利けるだらうか、どうだろうかが知りたくなつた。恥しい話だが、私は、「お前さんは未だ生きていたいかい」と聞いて見る慾望をどうにも抑えきれなくなつた。云いかえれば、人間はこんな状態になつた時、一体どんな考えを持つもんだらう、と云うことが知りたかつたんだ。

私は思い切つて、女の方へズツと近寄つてその足下の方へしゃがんだ。その間も絶えず彼女の目と体とから私は目を離さなかつた。と、彼女の眼も矢つ張り私の動くのに連れて動いた。私は驚いた。そして馬鹿馬鹿しいことだが真赤になつた。私は一応考えた上、彼女の眼が私の動作に連れて動いたのは、ただ私がそう感じた丈けなんだろう、と思つて、よく医師が臨終の人にするように彼女の眼の上で私は手を振つて見た。

彼女は瞬をした。彼女は見ていたのだ。そして呼吸も可成り整つてゐるのだつた。

私は彼女の足下近くへ、急に体から力が抜け出したように感じたので、しゃがんだ。

「あまりひどいことをしないでね」と、女はものを言つた。その声は力なく、途切れ途切れではあつたが、臨終の声と云うほどでもなかつた。彼女の眼は「何でもいいからそうつとしいて頂戴ね」と言つてゐるようだった。

私は義憤を感じた。こんな状態の女を搾取材料にしてゐる三人の蜷^{なみ}蟻共を、「叩き壊してやろう」と決心した。

「誰かがひどくしたのかね。誰かに苛められたの」私は人口の方をチョツと見やりながら訊いた。

もう戸外はすっかり真つ暗になつてしまつた。此だだっ広い押しつぶしたような室は、